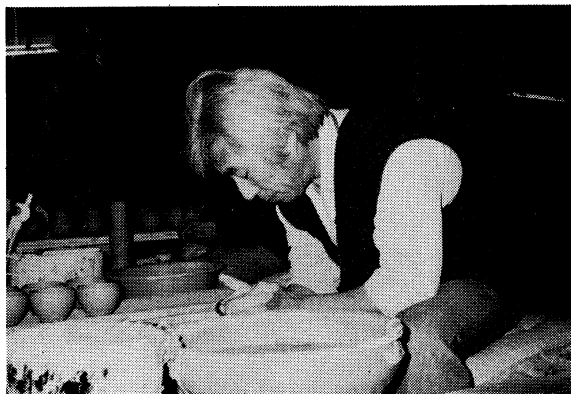




筆者作・土灰鉄釉白流傘立（昭和六十年五月作）

高さ五十七センチメートル・直径四十七センチメートル



制作中の筆者

の仕事が、いざやってみると非常に難しいものであり、まるで出来ない。失敗また失敗である。苦しかった。技量不足を思い知らされ茫然自失といった有様であった。若い頃、「毎日、親父はよく飽きませず同じ仕事をやっているなあ」などと思つて、自分の理想を追い求め、父の仕事に興味をもたなかったことが今になって大きな壁になつたのである。

宗像窯は伝統窯である。父以外の方に教えを乞う訳にもいかない。口ひとつとつてみても、その極意を知らず、全く途方にくれてしまったものであった。慌てた。しまったと思つた。標的を定めるのが余りにも遅かつたのだ。一体どうしたらいいのだろう。これからこの伝統ある窯を果たして承継いでいけるのだろうか。毎日悩みに悩んだ。

その頃からであろうか。

ようやく父や先人達の仕事の偉大さというものを身をもつて感じ、私自身の仕事——物造りとしての標的を何とか定めることができたのは。それまでは、如何に騒いでも走り回つても、結局父の手の中でのことであつたのである。いささか遅きに失したのであつたが、父の死をきっかけとして、先人の偉大さや長い修業というものもつ意味を知り、先人の業績と素直に向きあつて学ぶ心構えが大切であることを知つたのである。

それからというものは、伝統というものの重みを一段と強く感じ、今まで以上に伝統に生きようと決心した。新しい仕事、さん新さの追究ということも「物造り」にとつては誠に大事であるが、それにも増して大切なことは原点に帰つて先ず先人の仕事に追いつくことであり、間口を広げず、自分の標的を絞り、更に掘り下げていくことである。「真の物造り」に立つてこのことが最も大切なことである。

私は固くそう信じた。

提 言